
理系と文系（集）

午雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理系と文系（集）

【Nコード】

N3371L

【作者名】

午雲

【あらすじ】

俺は文系、理系な香とは、いまいち波長が合わない。

・・というお話なのでした。

（短編三つをここに集めてみたものです。）

出会い

この日本で三都といえば、京都、大阪、神戸だ。

近畿地方の住人なら、そう思う。

京都は着倒れ、大阪は食い倒れ、神戸は履き倒れ、と謂われて居る。

いつか紳助が、

「大阪は東京と競り合つとる気でおるけどね、大阪なんて周回遅れやで、周回遅れっ！」

Mr・オクレだけが笑って居たが、あのセリフを忘れない。

俺は、神戸が好きだ。

ドラマのありそうな街に思えるからだ。

だから一発バイトは地の理を見て決める。

神戸の空気を吸って居たいからだ。

（筒井さんの出身地だから、というのはあまり関係が無い。）

埋立地に向かうポート・ライナー。

無人運転にして単線である。

（モノ・レールという言葉なら・・・すでに死語である。）

ポート・ライナーは行く先が定まって居る。

ポート・アイランドか六甲・アイランドである。

俺は一発バイトの為に、この路線に乗った。

日曜日である。

いつになく若いカップルが多い。

ポート・アイランドはデート・スポットに為って居るからだ。

吊り皮につかまった男女が小声で会話している。

女の子の装いから見ても、高校生くらいだろう。

「今日、初めてのデートだね。」

「うん。」

「なんか、ドキドキ・・・するね。」

「うん・・・」

それだけ話して、

(・・・)

ふたりして、はにかんで居る。

俺は、たとえば、――

ひとりきりGジャンにGパンだ。

バイトに行くからだ。

(神戸に行けば、ドラマに会える・・・)

(・・・他人の、ドラマに・・・)

つい聞き耳を立ててしまう、自分の習性がうらめしかった。

終点で降りて、彼らはポート・アイランドへ行き、――

俺は、ひとり六甲・アイランドにへとむかう。

同じく埋立地と言っても、――

片やデート・スポット、片や工場地帯である。

（・・・別れ道・・・か）

夏なのに、寒かった。

バイトの中身は、

「かぼちやの仕分け」

だった。

港に荷揚げされた、かぼちやの山を仕分けするのである。

みると、自分の背丈ほど？もあるカゴの中に、

かぼちやばかり山盛りに成ってある。

その中から腐ったかぼちやをはねてゆくわけである。

こんなこと、機械でやってたら元が取れない。

なので、人手が要る訳である。

見張りがついて居るので案外、手が抜けない。

かぼちやの山が減ると、

今度はカゴの中へ入って腐ったかぼちゃをはねてゆく。

いい、というから靴のまま直じかにかぼちゃの頭を踏ふんづけて居た。

昼休み、――

バイト君が、めいめい休憩所にへと集まって来る。

今日は休日につき工場は動いて居ない。

弁当を平らげて、――

ドラム缶相手に俺がタバコを吸って居ると、――

見ず知らずな女の娘が、むこうから話しかけてきた。

陸上選手みたいなジャージ姿。

おさげ髪にして、おしゃれには縁が無いみたいだ。

「あの、タバコ吸われるんですか？」

「ああ、けむり嫌いなもの？」

「・・・いえ、タバコっておいしいんですか？」

「べつに、おいしいってわけじゃないけど・・・」

俺は、とっさに何と答えていいか思いつかなかった。

「きみは吸うの？」

「いえ。なんだかこわくて・・・」

女の娘なら当然だ。

タバコを吸って、いいことなんてあまり無いからだ。

（軽作業やから、女の娘でも来るんやろな・・・）

もっとしゃべろうと思ったけれど、

あいにく休憩時間が終わってしまった。

もう南瓜を見るのもイヤっちゅうくらい、

南瓜ばかりみて午後を過ごし、

工場を出た頃には、もう宵の口だった。

（今日、一回もお日さま見てないやん！）

そんなことを思いながら駅のほうへ歩いていると、

「ああっ、さっきのヒト！」

「ん？」

ジャージ姿の、あの娘が追いかけてきた。

「よかった。一緒に帰りたい、と思ってたんですよ！」

（え？）

「日曜日やもん。ひとりで電車のるの、何か、はずかしいし・・・」

「なんで？」

「だって、ここデート・スポットやし。」

「は・・・」

俺は、思わず笑ってしまった。

そう、この時間この電車に乗って、――

だれも六甲アイランドからの帰りとは思わない。

女の娘ひとりぼっちで乗り込んで来たら、――

まるで、フラれたみたいだ。

もっとも、彼女はジャージ姿だから、――

ホントはそんな心配、いらないのだが、ー。

「いいよ、三の宮まで一緒に帰ろう。」

「ありがとうございます。」

俺たちは顔を見合せてニコッと笑い合った。

俺が貧乏して居るのは仕送りが少ないからじゃない。

いわゆるコンパが好きだからだ。

場数を踏もうと思ってコンパへ顔を出しまくって居るうちに、ー

いつのまにか、やみつきになってしまったのだ。

でも、幹事役なので、感謝はされるがうまみは無い。

そういう性格なんやと今ではあきらめている。

なので、この出会いは内心、非常にうれしかった。

（神さまは見てくれとるんやな・・・）

いつになく、そんなことすら思っ居た。

電車で彼女と二人で乗る。

高校生なら朝が早いから車内は空^すいている。

俺たちは、隣り合わせに座って語らい始めた。

「きみは、学生？」

「はい。〇〇女学院の一回生です。」

（なにイっ!?!）

法螺なんて吹く子とは思えないので、――

そのまま信じることにする。

「そこやったらお嬢様学校やん、なんでバイトなんて、――」

バスすら乗ったことが無い、という子が生息する学校である。

「いろんな子が居ますよ、あそこだって!」

「敬語やなくてええで! タメ口でいこ!」

「え? あなたも一回生なんですか?」

「一回生やで!」

（ン浪やけど・・・）

「だってタバコ吸ってたやないですか? 年上やわ!」

十九歳でもタバコ吸う・・・という発想が、無いらしい。

「俺は高橋洋太、きみは？」

「わたしは二宮香、です。」

コンパの時のクセで、つい趣味など聞いてしまう。

「え？趣味ですか・・・えーとバケガクといきものかな？」

「へー、生き物が好きなんだ。」

「はい。高校のとき大好きでした。」

俺は文系だから、化け学、理科には興味が無い。

でも、生き物なら好きだ。

ここは、この話題で攻めるに限ると思っていたら、

二宮さん、彼女のほうから先に問いかけてきた。

「あの、高橋・・・さんに、ひとつ聞きたいことがあるんです。」

「え!？」

（え!？）

文系な俺は、そのセリフに敏感に反応していた。

（・・・これは、もしかして・・・）

ジャージ姿で街を闊歩するお嬢様。

自覚なき乙女・・・

磨けば光る原石・・・

とんでもない女の娘と今、結び付こうとしているのかも知れない。

俺は、とっさに次の質問を予想して、

ズラリと答えを並べていった。

（ファースト・キスってレモンの味がするって、ほんとうですか？）

（一度してみたら分かるとおもうよ！）

（わたし冒険がしてみたいんです。）

（あ・・・えっと俺でよかったら・・・）

（彼女、います？）

（いま、できたかも？）

（どんなタイプの女の娘が好みなんですか？）

（いま、わかったかも？）

（将来の夢・・・高橋さんの人生設計は？・・・）

（ん？ないことは、ないけど・・・（ホンマにないけど・・・））

その間、約0・4秒だった。

果たして、彼女は少しもじもじしている。

（わたし初恋なんですといわれたら、俺もそうなんだとー）

（なるだけ、さわやかに応えよう！）

と、俺はとっさに想っていた。

「高橋さん・・・」

「はい・・・」

「タバコ吸えるんですね・・・」

（そっちから来たか！？）

「香、いえ、わたし、前から疑問に思ってたことがあるんですけど・

・・」

「なに？」

「ゲップしたときタバコ吸ってたら爆発することがあるって、本当ですか？」

「ええっ!？」

俺は、絶句した。

「か、かのうせいはあるとおもうよ？」

「あれってメタン・ガスなんでしょう。メタンは発火しやすいから・
・・・・」

俺は、文系、

バケガクは苦手なので、

以下、省略しておく。

その後ふたりの仲がどうなったのか、は・・・

みなさんの想像に任せておくことにしよう。

(おしまい。)

だ〜れだ？

「香、夏休み、どうするの？」

「実家、帰るよ！」

「えーっ！？」

裕子が驚きの声をあげる。

今日は前期試験の最終日で、今、終わったところだ。

もう、これから夏休みである。

「帰らないとお父さんが心配するしーお金ももったいないし。」

「そんなのつまんないじゃないっ！わたしたち十八なのよ、学生よっ！あんたの人生がもったいないわよっ！」

「そうかしら？」

「そうよっ！」

裕子が躍起になってしゃべりかかってくる。

（なに、ムキになってるんだらう？）

と私は思う。

「ちょっと、これからつきあってよ、ね、香？」

「え？」

「サークル入ろうよ、サークル」

「だって、うちの学校、ろくなサークルないし」

「当たり前よっ！女子大のサークルなんて入ってどうするのよ？他学よ、他学、近くにいい大学がいっぱいあるでしょうが！」

「でも私、なんか恥ずかしいし」

「そんなこと言ったら、いつまでたっても友達なんてできないよ？自分から行動起こさなきゃ！」

(・・・)

裕子は見かけによらず積極的な娘だ。

気を許した娘とはうるさいくらいにしゃべる。

私と違って化粧も上手だ。

「・・・わたし大学デビューなのよ、だからね、ホントはひとりじゃ不安なの・・・」

と彼女がつぶやいた。

「そうなの？ちつとも知らなかった。」

「うちも親が厳しいのよ。わたしはずうっとこのときを待って居たの。」

「そんなに気合い入れてたの？」

「そりゃそうよっ！素敵な彼氏、見つけたいじゃない？なによ、澄ました顔して。あんただってそうでしょ？香？」

「・・・彼氏ねえ・・・」

私は思わずひとりごつ。

裕子はそれが癪に障ったらしい。

「香、あんた不自然よ！まずその髪型から何とかしなさいよっ！？夏休み終わってもその髪型だったら、私、もう一緒には歩いてあげないからー約束よ？」

そう言い放ったかと思うと、裕子は本当に行ってしまった。

「ちよ、ちよっと、裕子？・・・」

私は、あっけにとられる。

そうして駅までのきつい下り坂を、独りてくてく歩いていた。

こんなとき、香、いえ私はつい考え事をしてしまう。

このごろ考えているのは、無機物にも遺伝子はあるか？ということである。

例えば、コンクリートにも遺伝子はあるか？

もしかコンクリートを培養できたら物凄い発明なのに違いない。

（恋人はコンクリート）

って感じた。

気が付くと坂を下り切って駅の構内へと入る。

裕子の行き先なら予め分かって居る。

この駅から北の方角へふた駅ゆけば裕子のお目当ての学校が在るのだ。

（・・・行ってみようか・・・）

ふとそう思う。

私にとっても全然知らない大学ではない。

いつか、かぼちゃの仕分けのバイトへ行ったとき、

洋太君が、この学校の学生だと言っていた。

（メールアドレス交換したけどあれから一回も使ってない・・・
・）

（香、いえこっちからメールするのも何か変だし・・・・・・・・）

（洋太くん、どうしてメールくれないのかしら・・・・・・・・）

そんなことを考えながら、私は実家とは逆方向のホームへ立ち、そこから電車にへと乗り込んだ。

目的のはっきりしない行動なんて、私は本当は嫌いである。

裕子に言われてなかったら、迷わず真っ直ぐに実家へ帰って居ただろう。

そう、彼氏なんかはまだ欲しいとは思わないけれど、――

男の子の友達なら居てもいい、と思う。

もしか本命の彼氏ができたとき、口も利けないのでは失敗してしまいかも知れない。

そのくらいのことは・・・・香、いえ私にも分かる。

私はドキドキする胸をおさえながら、目指す駅へ、ひとり降り立った。

梅雨の晴れ間、薄曇りな空の下、通学路たる坂道をのぼる。

洋太君の通うOX学院もまた、坂の上にいる。

（・・・洋太君とばったり会わないかな？・・・）

と試してみたりもしたけれど、確率的に、現実ではムリがある。

思いに語らいながら坂を下り最寄りの駅にへと向かう学生たちとすれ違いながら、私は校門の前にまでやってきた。

「あ、君！」

（！？）

「はい？」

見ず知らずの男子学生に声を掛けられて、私は見返る。

ナンパだろうか？

見境いの無いことだ。

ーと思っていたら、

「君、中学生？学校見学とか？」

そいつが、そう言って、笑った。

（ええっ！？）

私は、とたんに真っ赤になってしまった。

ショックだった。

裕子を捜すのも、サークルの溜まり場を見学して回るのも、あの洋太君を尋ねるのもあきらめて、私はすぐに回れ右、脇目も振らず元来た坂を駆け下りた。

「あらら、彼女、けっこうカワイかったのにイ」

「おまえが余計なこと言うからだよっ」

「・・・キズつけちゃったかな・・・」

「冗談だってば、冗談、おおい」

男の子たちのそんな会話が小耳に届いたけれど、私は全てに背を向けて、逃げるように坂道を駆け下りた。

（・・・やっぱり裕子が言ったことは本当だったんだわ・・・）

洋太君からもメールが来ないはずだ。

道すがら、私は泣きそうになるのをこらえるのに苦労した。

「やあ、香、よく帰って来た、父さんうれしいよ」

（・・・）

父はいつもこんな調子である。

私がどんな格好をしていても、可愛いと言う。

これにだまされていてはダメだ。

だって、父さんが褒めてくれたって、彼氏ができるわけじゃないもの。

私は母に相談した。

「ねえ母さん、香、髪型、変えたいのよ？」

すると、母はうれしそうに目を丸くした。

「まあ、こういう風の吹き回し？彼氏でもできたとか？」

「そんなんじゃないわよっ」

（・・・そんなんだけど・・・）

なんのかんのと冷やかしながら、母は方法を教えてくれた。

失恋したとき発作的に髪を切って、おさげ髪にしまったことがあるらしい。

（父さんが初恋じゃないのね？）

（・・・内緒よ・・・）

わたしたち母娘は二人きりで笑い合った。

肝心なのは、前髪である。

これには、黒い輪ゴム（ヘアゴム）を使うと好いらしい。

しばらく伸ばしっ放しにしなければいけないから、眉毛より下へ掛かろうとするのを、折り返して輪ゴム（ヘアゴム）で止めてしま
う訳だ。

前髪と一口に言っても本数なら無数に有るから、私の髪は黒ゴム
だらけになってしまった。

鏡をみて、私がつぶやく。

「うわあ、ひどい格好。これじゃあ、表歩けないわ。」

「あら、かまやしないわよ？あなたくらいな年頃なら。」

「・・・そうかしら？・・・」

「そうよ。」

母の微笑む姿が、私の肩越しに、鏡に写っていた。

その言葉に勇気づけられて夏休み中、私はのほほんと外を出歩いて過ごした。

「改造中。」

と看板をぶらさげて歩いて居るようなものだ。

少し恥ずかしかったけれど、母の言う通り確かに誰も何にも言っ
て来なかったもので、いつしか慣れてしまっただけでお気に入り
たくなっていた。

日いち日と髪は伸び、――

やがて夏休みが終わる頃には、――

香、いえ私の前髪は、すっかりお下げからぬけだしていた。

黒いゴムを一つずつ外す時には、さすがに胸がときめく思いがし
た。

ちょっと、幽霊みたいだ。

さっそくなじみの美容院に飛び込んで、今風の髪型にしてもらっ
た。

「香ちゃん、大学生になったんだってね！」

「はい。この春から――」

「お下げ髪も卒業ですか」

「ええ。男の子に中学生かって言われたもので――」

「あはは、香ちゃんもいよいよそんなことを気にするようになったか」

「・・・そりゃあ、やっぱり・・・」

「大学デビューってやつねっ！はい、できあがったわよ！」

(・・・)

鏡に写る自分の顔をみて我ながら私は驚く。

美容師さんも、

「まあ、まるで別人みたいね！」

と一緒に喜んで呉れた。

「また、大学での話し、聞かせてね、香ちゃん！」

「はい。ありがとうございました。」

そうして、私は店の外へでる。

夏の日差しがすごくまぶしい。

なんだかスキップしたい気分だけれど、意味が無いので止めておく。

明日から、また授業が始まるのである。

例の電車に乗り換えて、早朝、学校にへと向かう。

気のせいかな、なんだか景色も違って見える。

私は、駅を二つほど乗り過ごして、あの坂道をのぼって行った。

今日は何故だか洋太君に会えそうな予感がしたからだ。

〇〇ウォーカーをみてファッションもそれなりに決めてある。

私は素知らぬ顔をして彼の学校の門をくぐる。

掃除のおばちゃんを見かけて、さりげなく尋ねてみる。

「あとう、一発バイトの掲示板、さがしてるんですけどー」

「あら、あんたみたいなお嬢ちゃんがかい？」

「ええ。構内に張り出してあるって聞いたもので・・・」

「それなら厚生課だろうよ。あの校舎の一階さ。行ってみなさい。」

「はい。ありがとう。」

おばちゃんにお礼を言って、私は厚生課にへとむかう。

校舎に足を踏み入れると、掲示板の張り紙がすぐ目に留まった。

まだ午前中なのに、もう学生がちらほら屯ろして居る。

あ、なんだか見覚えのある顔が、約一名。

わたしはそつと携帯を取り出して、自分からメールしてみる。

だーれだ？

受信音に驚いて、彼があたふたとポケットに手をつっこむ。

何故か受信音はドリカムの未来予想図、そのカラオケ・バージョ
ンみたいだ。

私はクスッと笑みをこぼしながら、こっそりと彼の背後へ近寄る。

彼は携帯の画面に見入って居て、私のことに全く気がつかない様
子。

私は、両手の手の平で、彼にいきなり目隠しを仕掛けた。

「だーれだ？」

「うわっ」

彼がびっくりして、携帯を取り落とす。

手を離してあげると、たちまち彼が振り返った。

(・・・?・・・)

彼は瞬きして、私のことを眺めなおす。

私も改めて、彼のことを見返す。

「・・・どちらさまでしたっけ？」

「ふふ・・・改造した香です。ほら、かぼちゃの仕分けのバイトで会ったー」

「あ、ああ・・・」

全然わかってないのに、とりあえずうなづいてみせる彼。

ほら、視線が遊んでいるのがその証拠だ。

（・・・これは改造が必要ね・・・）

出会った頃の、自分のことは棚に上げて、ー

香・・・いえ私は、ひそかにそんなことを、思ってたのでした。

（おしまい）

おおみそか

十二月・・・

もう、冬季休暇である。

クリスマスが終わって、香は実家に帰ってしまった。

俺は一人、まだ下宿に居残っている。

仕送りが入ったが、通帳を見ると家賃の分きっかりだった。

金額は内緒である。

（おい、帰りの交通費が無いやんか!?!）

（・・・気が利かんなア・・・）

幸い、目をつけてある一発バイトはあるのだけれど、一

もっと好い手がある。

下宿の近所に大きな競馬場が在るのである。

確か今週は有馬記念。

競馬なんて全然わからないけれど、一

競馬場が近くに在るのだから・・・仕方がない。

毎週月曜日になると、――

好き者どもが”自分はかく敗れたり”とばかり語り回るので、――

少しは俺も聞きかじって居た。

（なんでも四番人気以内の馬がよく来るらしい。）

自称馬券師志望の先輩がそう言って居たのを思い出す。

文系な俺は数字が苦手だ。

実は競馬新聞の読み方もまだよく解らなかった。

なので、道すがら知ったかぶりに新聞をにらみつつ、――

当日の人気順およびその馬名だけを確認する。

（お！三番人気は・・・レガシーワールドか・・・）

（カッコイイ名前だな・・・）

たったそれだけのコトで、もう本命を決めてしまった。

え？頼りは自分の強運である。

理由なら、それで充分なのだ。

足の赴くままに歩いて、やがて目指す場所にへとたどり着く。

この道のりなら、もう通学路みたいなものだ。

確か四番人気は彼の名馬トウカイテイオー。

骨折をものともせず先頭で駆け抜けたという不屈の根性の持ち主である。

しかし以来、長期休養を挟んで凡走が続いて居た。

どうせ交通費が足りないんだ。

ここまで来たからには後には退けない。

俺は晩飯代だけを残して全額、馬券に替えてしまった。

理系な香ならレースなんて観ないだろうが、

文系な俺は観てしまう。

むしろ観ずには居られない。

一心に祈れば、やっぱり通じるような気がするからだ。

果たして、――

館内にはティオー・コールが鳴り響き、――

俺は人知れず途方に暮れて居た。

（香ィ・・・）

（・・・レースなんか観なきやよかったよ・・・）

覚えず彼女の姿を思い浮かべてしまう。

（香なら、どんな予想を立てて居ただろう？）

（・・・・・・）

（賭けごと嫌いだからムリだろな・・・）

俺はむなしく苦笑いした。

さて、――

目をつけて居たのは屋台のバイトである。

商品は天津甘栗。

つまり売り子である。

都合がつけば連れに代打を頼むつもりだったのだが、――

事、こうなっては仕方が無い。

小雪がチラつく明け方・・・

寒さを押して俺はバイトにへと出掛けて行っただ。

とあるスーパーの店先・・・

目立つ所に、もう屋台が設えてある。

つまり年末大売り出しを盛り上げる”客寄せ”なのだろう。

大将は愛想の好いおっちゃん、俺の人と形りをひと目みて、

「ほな、任せたで！」

どっかへ行ってしまった。

「多少なら、つまんで食べてもかまへんさかい。」

「あ、ありがとうございます！」

昼飯はどうやって食べるのだろうか？

それに気がついたのは、だいぶ後のことだった。

甘栗が売れ出すのは、やはり夜に入ってからである。

母親に手をひかれている子供がきまってせがむのだ。

石焼きイモよりずっと好い匂いが鼻をくすぐるのだから仕方が無い。
い。

「おかあさん、あれ買って！」

お客さんが向こうから寄って来て呉れるのだから有り難い。

子供は神様である。

つい、ひとすくい余計に入れたりしてしまう。

「あら、いいんですか？」

「かまやしません。よいお年をー」

「ありがとう、おじちゃん」

（おじちゃん！？）

それにはガクツと来たが、子供もよく分かって居るものとみえる。

気がつくつと、俺も相当つまんで居た。

たまにふらっと大将が見回りに来る。

「おい、天津甘栗って何で天津甘栗っていうか知ってるか？」

「知りません。天津の栗を使ってるからですか？」

「そう来ると思うた！」

「は？」

「この栗はみーんな日本の栗や。天津甘栗の焼き方で焼いとるから天津甘栗ゆうんや！」

（！？）

確かに間違っではないない。

でも何か違うような気がする。

香なら、こんなとき何て言い返すだろう。

「よう売れてますよ！」

「そうか！」

俺が言うと、大将はにっこり笑って、

「ほな、この調子で大晦日まで頑張ってや！」

「はい。」

なにせ日当一万二千円（栗付き）だ。

俺は快く返事した。

大晦日の日はお約束の大繁盛で、ー

日暮れを待たずして、先に釜の栗がなくなってしまった。

「よっしゃ！もうええわ！兄ちゃんアガリィな！」

気前よく大将がそんな声を掛けてくれる。

ただし、ー

売上げを勘定しながら、ちょっと首をひねって居た。

「なんやちよつと栗の量かさと銭の額たかとが釣り合わへん気がするな」

（ドキッ）

調子に乗ってお客さんにサービスし過ぎたのだ。

俺は根が文系なのだから仕方が無い。

香ならきつとこんなヘマはしないだろう。

果たして、大将は、

「来年もここで店開きするさかい、まあええってこつちゃ！」

ごきげんな笑顔を向けて、そう言って呉れた。

「ほな、これ、給料や」

万札が四枚。

しかしてバイトは三日間。

「あ、細かいの持ってないんで・・・ちょっと待ってて下さいよ」

財布の中身が図らずもバレてしまう。

「釣りなんか要らん。よう頑張ってくれたさかい、サービスしとくわ。」

そう告げて、大将は二カッと大人の笑いをした。

（なんで知っとなねん！？）

俺は真っ赤になって、頭を下げて居るばかりだった。

帰り道、最寄りの駅にて電車を降りると、いつしか雪が降って居た。

大晦日の夜・・・

通い慣れた坂道にはうっすら雪が積もって居る。

雪化粧。

その言葉は夜にこそふさわしい。

白一色に映える道に、俺の靴跡だけが点々と刻まれてゆく。

（・・・たまには、こんな夜もいい・・・）

今度、香に会ったら何て話してやろうかと思いつつ、

俺は一人、ゆっくりとその坂道をのぼって行ったのでした。

（おしまい）

おおみそか（後書き）

読んでくれて、ありがとう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3371/>

理系と文系（集）

2010年10月10日19時11分発行